

会 議 名	令和6年度第3回小金井市立はけの森美術館運営協議会		
事 務 局	市民部 コミュニティ文化課（はけの森美術館）		
開 催 日 時	令和6年11月27日（水）18時30分～20時00分		
開 催 場 所	市立はけの森美術館 多目的講義室		
出 席 委 員	鉄矢悦朗会長 山村仁志委員 原田隆司委員 畑島一代委員 平田勇治委員 中川法子委員		
欠 席 委 員			
事 務 局 員	コミュニティ文化課文化推進係 津端 佐原 同 はけの森美術館学芸員 中村、河上、五木田 同 はけの森美術館学芸顧問 河合		
傍 聴 の 可 否	可		
傍聴不可・一部不可 の場合は、その理由		傍聴者数	0人
会 議 次 第	（1）事業報告等 （2）意見交換 （3）その他、次回日程調整等		
会 議 結 果	別紙のとおり		
会 議 要 旨	別紙のとおり		
提 出 資 料	資料1 教育事業報告 資料2 日程表		

【鉄矢会長】 本日御多忙の中お集まりいただき、ありがとうございます。ただいまより令和6年度第3回小金井市はけの森美術館運営協議会を開会いたします。

最初に、資料の確認を事務局よりお願いします。

【事務局】 事務局です。今日、お手元に資料3点ございます。最初に次第が1枚、資料1、ホチキス留めのものが1つ。資料2が1部、以上3点になっております。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。皆さん、お手元に3点ございますでしょうか。

それでは、次第にしたがっていきます。

次第の第1番です。事業実施報告等について事務局から説明をお願いします。

【中村学芸員】 では、実施した展覧会・教育普及事業等（報告）というところから、学芸員の中村より報告させていただきます。

まず、お手元の資料1の冒頭から御覧ください。現在、開催中の展覧会ですが、すいません、展覧会名が抜けておりますけれども、展覧会の名前が「富永親徳という近代洋画家がいた一記録と場所をたどる」という形で、11月2日から展覧会開催中がございます。既に展覧会の内容については下の展示室で御覧いただいたかと思いますので割愛させていただきますけれども、この後、年を挟んで1月13日、月曜祝日まで開催予定です。

現在の入館者数に関しましては、11月26日時点という形で記載しておりますとおりで978人ということになっております。こちらの978人のうち、およそ半数が観賞教室で来館した子供たちということになっておりますけれども、鑑賞教室につきましては、この後まとめて報告させていただきます。

関連企画のところですが、こちら、まとめて関連企画という形で記載しておりますので、一部まだ開催されていないものも含めて載せております。開催されていないものに関しましては網かけをした状態になっております。（1）の展覧会プレ企画 台湾アニメ映画「幸福路のチー」上映会ですが、こちらは展覧会の会期に先立って、10月26日に行われたものです。美術館2階のラウンジを使いまして、台湾のアニメーション映画として「幸福路のチー」というお話を上映いたしました。1回目と2回目、午前の回と午後の回というのを設けまして、1回目が17人、2回目が11人の参加がございました。こちらの映画の上映会ですが、参加費400円という形で頂いているんですが、その代わりに招待券をつけるという形を取りまして、展覧会の一般入館者がちょうど400円ですので、展覧会のプレ企画に参加してくれた人は展覧会のほうは招待で入

れるよという形にしてプレ企画としております。

何で台湾のアニメ映画を上映するものに選んだのかにつきましては、これは富永親徳という人物が青年期を台湾で過ごして、特に展覧会のほうでも台湾の風景を描いた作品というものが第1章を構成しているというところから、「幸福路のチー」という台湾のアニメーション映画を選びました。ただ、台湾を舞台にしているということだけでなく、「幸福路のチー」という作品の中に見られる背景美術として、特に富永親徳が描いていた台湾風景と関連づけて見られるようなものというものが多く描かれていて、ストーリーだけじゃなくて描写のほうからもいろいろ考えられるということでこちらの作品を選んでいきます。

2番目の水彩画ワークショップですけれども、こちらもそういった意味ではアニメーションの背景というものについて着目して、特に今回風景画というところに重きを置いていた富永親徳の画業と関連づけてやれないかということで、こちらのほうは現在募集しているところで、12月7日に開催予定のワークショップです。アニメーション背景を実際に制作している牟田いずみさんに講師をお願いしまして、アニメーション背景を描くに当たってどういったテクニックを使っているのかというのをポスターカラー等使って、みんなで作ってみようという内容で考えております。

次のページ、2ページ目に行きまして、企画展特別レクチャー「石川欽一郎と台湾」は講演会ですけれども、府中市美術館の学芸員である志賀先生をお招きしまして、石川欽一郎という富永親徳にとっては台湾期において非常に重要な先生となった人物と、そして、その石川欽一郎がどういった形で台湾の美術に関わっていったのかということについてのテーマを講演していただくということで予定しております。こちらのほうは参加無料ということで、ただ要申込みということで考えておりまして、しばらくしたら、こちらのほうも申込みがスタートする予定です。

4番目のギャラリートークに関しましては、11月23日にゲストトークによるギャラリートークが開催されました。ゲストとして、埼玉県立近代美術館に移られた、当館で勤務されていた西尾さんに来てもらいまして、西尾さんのトークをしてもらうということで、前半は2階のラウンジを使ってスライドを映して説明してもらって、後半は展示室に降りていって、実際に関わっている作品について説明してもらうという形式を取りまして、参加者としては22名ということで非常に盛況でした。

この後、12月14日に当館学芸員によるギャラリートークを予定しております。

展覧会に関する報告としましては以上となります。

【鉄矢会長】 引き続き、教育普及事業をお願いします。

【河上学芸員】 そうしましたら、2番目の教育普及事業について御報告させていただきます。学芸員の河上です。

今、こちらの項目が2番から始まっているんですけども、これ、1つずつずれて、1、2、次のページが3、4で、4つで項目を分けております。失礼いたしました。ですので、修正していただいて、1番の茶室「花侵庵」文化財登録5周年記念ワークショップ「はけの森写真教室一光をみる」という、こちらは写真家の稲口俊太さんという方をお招きして、写真のワークショップを開催いたしました。稲口さんは、2022年の志村信裕展のときからなんですけれども、こちらの美術館での展示風景などを記録で撮っていただくために依頼しているカメラマンさんでして、その方をお招きして、今回は「花侵庵」の文化財登録5周年記念というところで、実際に「花侵庵」の写真を撮ったり、あとは事前に写真の仕組みなんかをレクチャーいただいたりして、一般の方向けに講習会のような形で無料イベントとして開催をいたしました。スマホとかでも参加いただけるということで呼びかけたんですけども、結構な人数の方が本格的なカメラをお持ちで、実際買ったけどどうやって使っているかわからないみたいな機能とかを、その中で簡単に優しく説明を入れていただいたりして、本当に初心者向けのワークショップといった形で開催されて非常に好評で、また定期的にやってほしいというようなお声も幾つかあったので、また来年以降ということで、教育文化課の担当とは話をしたりしておりました。こちらも定員が20名だったんですけども、締切りよりも前の段階で定員に達しまして、20名というところで開催をいたしました。というのが1番、「花侵庵」の写真教室の御報告になります。

2番に関しましては、中村のほうから御報告いたします。

【中村学芸員】 表示では3番になっておりますけれども、2番になります。子供向けワークショップ「からっぽの展示室をみんなでいっぱいにしよう」につきましては、中村より御報告させていただきます。

こちらですけれども、10月6日に行われまして、このとき空調の修理に伴って展示室が空っぽでしたので、空っぽの展示室を会場として活用して何かできないかということでこうした企画が考えられました。

広いスペースを活用して、人形劇、読み聞かせ、お絵かきを同時開催するという複合的なワークショップだったんですけども、この中でも特にポイントは、空っぽの展示室を広さとして活用できないかということで、最後のお絵かきのところ、みんなでそれぞれ各

自に紙を渡してお絵かきをするのではなくて、大きな紙にみんなで何か書くということではできないだろうかということで、1メートル掛ける10メートルの画用紙を用意しまして、これにみんなで「おおきなおいも」を書くということを再現できないかということで、こちらは講師をしてくれたこごうちぶんこことりのへやの皆さんが、そのテーマに合わせて、それ以外の人形劇ですとか読み聞かせというところも考えて、できるだけ統一したテーマをつくろうということで、このときは「おおきなおいも」を描くということを念頭に、人形劇もおいもをテーマにした人形劇で、これは動物が出てきたりするようなものを考えていただきまして、読み聞かせのほうも、「おおきなおおきなおいも」という1972年に刊行された、これは恐らく保育園とか幼稚園などではすごく人気のある絵本として長らく知られている作品ですけれども、それを読み聞かせしてもらって、最後においもを実際に準備して、かごに入れておいてもらって、それを見て、みんなでそれまでの経験を生かして、イメージを膨らませて、紙いっぱい絵を描こうということでやりました。

これは25人申込み先着順ということだったんですけれども、申込みが結構早い段階でいっぱいになりまして、当日お一人病欠ということでお休みがあったんですけれども、24人子供たちが参加してくれて、人形劇、読み聞かせを経てお絵かきをするということで、お絵かき、最初はこごうちぶんこさんが想定していたよりも年齢層が低めだったので少し心配されていたそうなんですけれども、非常にスムーズに進みまして、最後にみんなで大きな絵を仕上げて、10メートルの絵をみんなで持って記念撮影をするということで、子供たちは非常に満足していました。

このワークショップに合わせて、実は新品のクレヨンも消耗品として購入したんですね。参加してくれた子供たちの保護者の中には、アンケートで聞いてみると、やっぱり自分用に新しいクレヨンを1つ与えられて、それで好きに書いていいよと言われるという経験が初めてですごくそれがよかったと書いてくださった方もいて、ああ、よかったなと思ったんですけれども、一方で、最初に1人新品を使っちゃうと以降の人は中古のクレヨンを使うことになるので、1回使ったら捨てちゃうというわけにもいきませんし、ここは今後考えていかねばならないなと思ったところでもあります。

2番目のワークショップに関しての報告は以上でございます。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。

では、3番目。

【河上学芸員】 学芸員の河上です。

次のページ、3 番目、「みつけた！はけ化けの森の展覧会」とございますけれども、こちらは8月に開催した工作のワークショップがございまして、絵を描くときのはけを使っておばけをつくるという工作のワークショップをしたんですけれども、そこで誕生したはけ化けたちを、展示した展覧会イベントを2日間にわたって開催いたしました。

これが11月9日、10日で、富永展が開催してすぐの次の週末で開催いたしまして、無料イベントであり、かつ参加された方には工作ワークショップの講師で来ていただきましたはけの手アニメーションさんのオリジナルでつくったシールが特典でもらえたりとか、お祭りのイベントだったので、こちらにありますように参加者の人数がとても多くて、1日目は大人87子供39、2日目は大人が100人以上来て、大人101人、子供が53人と、非常に活気のあるイベントになりまして、独自ではけ化けのおばけたちを展示したり、あとは2階のラウンジに展示したりして、はけ化けを判としながら、スタンプラリーのようにチェックしながら巡って、はけ化けを見つけながらこの緑地のことを知ってもらったり、美術館のことを知ってもらったりというような、そういうきっかけになるようなイベントにしたいということで、はけの手アニメーションさんが企画してくださいました。

とても良いイベントになったんですけれども、一方で、そんなイベント参加者の皆さんが美術館のほうに来てくれるかなとすごい大きな期待をして待ち受けていたんですけれども、これは通常の土日の人数とさほど変わらず、お天気も実は少し悪くて、1日目は美術館の来館者数は30名弱、2日目が40人台だったかと思うんですけれども、ちょっとこのつなぎ方みたいなものはこれからの課題なのかなと思いますけれども、とはいえ、この日は市内で産業祭とかいろんなイベントが開催されていた日として、この日は市長も来館というか、イベントのほうに参加されたりですとか、そういった目玉イベントの一つとなったことはとても喜ばしいことだったなと思っておりますが、美術館も頑張らなきゃというのも同時に考えさせられたようなところでございます。

3 番については以上です。

【事務局】

4 番について、今回、喫茶棟のほうオープンして1年目ということで、今年度は喫茶棟と連携して何か事業をしようということで、2本、事業を考えました。1本は、喫茶棟での音楽イベント、2本目が散策イベントということで実施をしております。

1つ目の喫茶棟との音楽イベントのほうは、10月18日金曜日の夜に喫茶棟のほうで

やりまして、hirasaka yutakaさんというギタリストさんをお招きして、演奏が1時間、あと御飯とデザート、楽器とお茶がついてくるというイベントをやりまして、定員20名すぐこちらで埋まって、小学生ぐらいの子も1人いたんですけども全然騒がずにずっと聴けていて、すごくゆったりとした時間を過ごしました。皆さん好評で、弾いていただいたhirasakaさんもまたぜひやりたいという御感想をいただいております。

2つ目が散策イベントと書いてあるんですけども、こちら、タイトルが去年もやりましたはけの森散歩ということでシリーズ化しております。今年は「紅葉のはけの森と野川を歩く」ということで、11月23日、先週の土曜日に行いました。小金井まちおこし観光協会からまちなか観光案内人の会ということで、実は原田さんを筆頭に3人来ていただきまして、はけの森美術館を出て、野川のほうに行って、二枚橋のほうまで行って、またぐるっと別の道を通って戻ってくると、また裏のお庭も散策してというような感じで、1時間ぐらいのコースをみんなで回ってきました。定員が20名でした。当日、やっぱり体調不良とかもあって15人の方が最終的に参加をされております。アンケートもいただいているんですけども、すごくよかったなと思うところは、小金井に越してきたばかりですが、とてもよい市に来たと嬉しくなりましたと、原田さんの解説がよかったんだと思います。あと、野川付近の散策がとてもよかった、本日のコースを後日散歩したいと思ったというような御意見もいただいて、またぜひ野川の散策をしながら、また別の展覧会にも足を運んでいただけるようにつながっていけばいいなと思いました。

同日に行った元当館の職員の西尾さんのギャラリートークが散策の後にちょうど続くということで、1時から2時で皆さん1時間一生懸命歩いて、2時になったら西尾さんの解説を座って30分聞いて、今度1階でギャラリートークを見るという2時間コースで、皆さんほぼほぼ、15人のうち10人ぐらいは行っていただいたのかなという感じで、セットで楽しんで、がっつり2時間はけの森に浸っていただけたかなと思います。アンケートも書いていただきまして、とてもいいイベントだったなと思って。

ぜひ、シリーズ化して続けていけたらいいなと思っております。

4番については以上です。

【鉄矢会長】 では、3)鑑賞教室。

【河上学芸員】 学芸員の河上です。

3)鑑賞教室について御報告いたします。今年も市内小学校の小学4年生の鑑賞教室が実施され始めていて、既に4校の鑑賞教室が終了しております。こちらにありますとおり、

11月1日金曜日、東小学校、11月8日第二小学校、14日第四小学校、19日第一小学校と。最近というか去年ぐらいからなんですけど、これまでは1つのクラスの滞在時間というのが大体50分から60分というところが平均的なところだったんですけども、今年に入ってから、30分の学校さんとか40分の学校さんとかというの中にはありまして、やはり引率の先生の数が足りなくて1回戻ってから来なきゃいけなかったり、そういう事情があったりですとか、いろいろな影響があって、少し、2校ぐらいは30分とか40分の学校さんがあるんですけども、できる限りのところで展覧会のほうを見ていただいて、プラスアルファで、いつも裏の緑地のほうを見学して、御案内してから皆さんに帰っていただくというようなコースをつくっていて、今年もそのような流れで各校御案内をしています。

ですので、今回は非常に珍しいのですが、前半のほうに展覧会が開催されなかったというところで、全校9校が富永展に集中しているということで、ほぼ毎週観賞教室が入っているようなスケジュールで今実施をされております。ですので、あと残りの5校が11月に1つあって、あと4つは12月に全部あるということで、全校が同じ展覧会を見るというのは、実は私がこちらに所属してからは初めてなんですけれども、なので、どんな感想の違いがあるかとか、共通の感想があるかとか、後から感想を見比べるのが楽しみだなと思っていますけれども、順調に実施をしております。

以上です。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。

今、ここで1回質疑がありましたら。何か質問等ありますか。

【原田委員】 先ほどの散策イベントの当事者として御報告をします。一番よかったなと思うのは、いつもの我々がやっているまち歩きのお客さんとがらりと変わりました。いつもは大体高齢者なんですけれども、今回はそうじゃなくて、さっきのお話のように越してきたばっかとか、若い40代、50代、それから一番若い方は10代の大学生。その10代の男の人でも上京してきたばかりで右も左も分からなかったのが大変面白かったと。

あともう一つは、幼児がいる若い夫婦は、割に武蔵野公園とかくじら山とか来るんですけども、そうじゃない人たちというのは、この市の東南部というか、あんまり縁がないんですよね。その縁がないところにこの美術館も入っているんですよ。だから、今回来て、あ、こんなところがあったのかというんで、また一緒に歩きたいとか、もう一回美術館に来たいとか、という感想を持っていただけたら、広報イベントとしてもお役に立てたのか

なと思いました。

以上です。ありがとうございました。

【鉄矢会長】 これは市報が効いたんですか。

【河上学芸員】 そうですね、アナウンスとしては市報だけだったのに、ざざざっと埋まっていたと。

【原田委員】 不思議ですよ。ふだんのまち歩きも市報だけでやっているんだけど、全然客層が違うというのは、やっぱり美術館に絡んでいるということなんですかね。

【鉄矢会長】 載ったのが違うんですか、募集。

【中村学芸員】 いや、同じようなところにやったと思うんですけど。

【原田委員】 いつものまち歩きよりもスペースは大きかったです。

あと先ほどのギャラリートークの御報告で、前半が座ってスライドを見る、後半が会場、それもよかったんですよ。1時間歩いていましたから。30分座って見て、基本的な知識を得て、それから回るという組立てもすごくよかったなと。偶然だと思いますけども。

【鉄矢会長】 そのほかございますか。

すいません、私がちょっと聞きたいんですが、学芸大鑑賞ボランティア参加、どんな感じだったんですか。

【河上学芸員】 すみません、ここ、言及するのを忘れ、すみません、失礼しました。1名応募がありまして、参加していただいて、本当に1人増えるだけでも全然こちらのオペレーションが非常に楽になりますので、あとは、どの学校か分かっちゃうかな、かなりやんちゃなクラスが含まれた学校さんとかだと、そのボランティアさんがいなかったら本当にどうなることやらというようなこともあったので、どういう形かあれですけども、もし大人の目をこの鑑賞教室に増やすという方法として、こうしたことが今後も続けられたら非常にうれしいなと。

ただ、やはり今回は1人しか応募がなかったので、今後本当にうまくできるかということ、ちょっとそこに頼ってしまっただけではいけないんですけど、引き続き働きかけをさせてもらえたらうれしいなと思っております。

【山村委員】 感想いいですか。

【鉄矢会長】 はい、お願いします。

【山村委員】 展覧会、大変面白く、富永親徳という洋画家、板絵も多かったんですけども、大変数もあって見応えもありました。1章、2章、3章と丁寧に分けていただい

て、飾り方もすごく工夫していて、板絵とか、キャンバスのままの作品、きれいに展示されていて、涙ぐましい努力があって非常に好感を持ちました。

ただ1点だけ、制作年はほとんど分らないんですよね。だから、せっかく台湾時代、1906年ぐらいに10歳で台湾に行ってから、1919年に23歳で東京美術学校の試験を受けて、それから勝浦時代、それから戦争中、1944年に小金井に引っ越してきたという、そういう時代区分が3章で構成してあるから、大体台湾時代で、何歳から何歳までこれぐらいの年代というふうに、ある程度、何て言うんですかね、章に書いてあるんだけど、お客さんのほうにも、台湾時代、何年から何年ぐらいとかいうふうに年代が分かるのもっと分かりやすかったかなと思います。特に作品が大きく展開したわけじゃなくて、むしろ23歳までの台湾の風景がいいなと思ったぐらいなので、時代とか年齢が分かると、もっと見る方がわかりやすかったかなという感じがしました。

以上です。

【中村学芸員】 ありがとうございます。

【鉄矢会長】 本人のサインは親徳（しんとく）なんだけど、今後は親徳（しんとく）と呼ばないんですか。

【中村学芸員】 多分、戸籍のほうの名前が親徳（ちかのり）さんで、家族はみんな親徳（ちかのり）さんと呼んでるんですね。

【鉄矢会長】 本人のサインは親徳（しんとく）でしたよね。

【中村学芸員】 親徳（しんとく）なんです。

【山村委員】 これ、チラシの絵にしんとくと書いてある。

【鉄矢会長】 本当だ。学芸員さんが親徳（ちかのり）さんと呼んでるんだと。

【中村学芸員】 ちょっとそこで言うと、実は私たちがこの画家のことを知ったのは、御遺族からこういう絵があるよと連絡を受けてからのので、御遺族は親徳（ちかのり）さんと呼んでいて、私たちはまず親徳（ちかのり）さんとイメージを持ったというのが大きいかなと思うんです。

ただ、作品として見る限り、本人が少なくとも自分の作品だって思ってサインに入れるときには、必ず親徳（しんとく）と入れていることがほとんどですので、そこで言うと、画家としての自分と、恐らく家族の中での自分というものを本人の中で区別して切り分けていこうという考えがあったのかなという感じもする。確証はないですけども、画家としての自分を親徳（しんとく）という音読みのほうで呼んでいるということと言うと、台

湾で過ごして、青年期、画家になろうと決心をしたのは台湾だったというところに何か通ずるところがあるのかもしれないんですけども、ちょっとそこはまだはっきりしていないので、一旦ちょっと表記は並記を取っています。

【鉄矢会長】 今後、学芸員という研究者として、どっちでこの方を発見して、発見したわけじゃないですか。どっちの名前で売り出していくとか、世に知らしめていくのかなというのが。

【中村学芸員】 ただ、やっぱりサインとして見ると、画家として美術館が出していくと考えると、親徳（しんとく）になるのかなという気もしているんですけども。

【鉄矢会長】 分かりました。では、親徳（しんとん）で呼んでいきます。多分そういうことが美術館で、新しい第1発見者のような位置なんだろうなと思うんですよね。面白いです。

【中村学芸員】 ただ、意外と今回、この親徳（しんとく）さんの御遺族の皆さん、人数が非常に多いんですけど。

【鉄矢会長】 すごい、7代でしたっけ。

【中村学芸員】 そうなんです。の孫とか、そういう世代の方たちが見に来てくださって、すごくそれぞれに、おじいちゃんの思い出というのを持っていて、大切にしていってらっしゃるようなんですね。そういった意味では家庭の中の親徳（ちかのり）さんとしての部分というのがすごく大事なんだなとは思って。

【山村委員】 ちなみに、鑑賞教室とか、お客さんの反応とか、どんな感じですか。

【河上学芸員】 鑑賞教室は今、まず、あまりに詳しい説明みたいなのはせずに、ただ、この台湾という場所で3つ、今回はコーナーを分けていてというところで、どんなところが描かれているのかなというようなお題を与えて、それから見ていただくようなスタイルにしているんですけども、一つ非常に面白い発見というか、面白いのが勝浦の絵です。あれに小金井市民の子供たち、ないし教員の皆さんがとても反応するんですよ。どうしてだろうと私たち最初分からなくて、そしたら、後日、別のお客様がいらして、勝浦の絵見せてるねって、でも、小金井市民みんな好きだよとかって言われて、なぜですかと言ったら、5年生の移動教室で、昔から勝浦とか鶴原のほうに小金井市民は行っていると。なので、そういった意味では、千葉の海の風景ってとても親しみのあるところだったそうで、私たちはそれを後から知ったんですけど、ただ、今の小学生は、今年から実は勝浦じゃなくなっちゃったそうなんです。去年まで勝浦だったんですが、今年から南房総になっちゃ

やっとならしいんですけど、でも、やっぱり千葉の海の雰囲気ってすごく特徴的というか、ああいう絵から感じ取れるものってちょっと共通する部分があるので、先生方も非常に喜んでいて、ちょっと、どんな絵かというところよりもモチーフの話になってしまうんですけども、なので、勝浦の絵ですごい反応があって、台湾という国も、たまに行ったことあるという小学生もいたりとか、あとは、やっぱりさすが小金井市民という感じなんですけれども、あそこの最後の3枚の土手というか、川の桜の絵が、みんなやっぱり玉川上水って、あそこに何も書いてなくても玉川上水か野川かどっちだみたいな感じで、小金井と言わずとも子供たちが反応するというのはさすがだなと思いながら、でもあんなふうに、板に絵が書いてあったり、油絵をこういう量で見るというのも初めての経験なので、鑑賞教室に関しては非常に満足していただいているんじゃないかなと思っています。

【鉄矢会長】 道具箱じゃなくて、あの絵の箱が、何て呼ぶんですか、あれは。

【河上学芸員】 分からないんですよ。すごく調べているんですけど、キャリア、板絵運び……。

【鉄矢会長】 板絵のあの……。

【山村委員】 いや、パレットのところにを入れる道具箱でしょう？

【鉄矢会長】 板絵を縦に5枚ぐらい入れられるようになっている箱。

【河上学芸員】 引き出しを縦にしてみたいな。

【山村委員】 あれはそれ専用なんだ。

【河上学芸員】 板絵を収納して持ち運ぶためのキャリアなのか、でも、あの名称がずっと、調べていても私たちも分からなくて。

【鉄矢会長】 あれは市販なんじゃないの？ 市販ですよ。市販品で、だから、板も市販品なんですよ。

【山村委員】 板は市販品ですよ。ただ、ああいうものをてっきり道具箱だと思っていたから、あれはそれこそ板絵用のものなんだ。

【中村学芸員】 多分板絵用に、小さいのと中くらいのと大きいのと、規定のサイズがあるみたいなんですね。恐らく既製品の板に合わせて、それぞれのケースがつくられていて、取っ手の裏側に神田文房堂のシールが残っているので、ちょっとそういうところから見ると、おそらく板絵を持ち運んで書く人向けに売られていたものの可能性が高いんですけども。

【鉄矢会長】 油絵が乾かないうちに入れられるように隙間が空いているのは面白いな

と。

【山村委員】 多摩美でもないんですか。

【中村学芸員】 実は展示の設営をしてくださったイベント設営のスタッフさんもすごく興味を持っていて、こういうものをどうやってつくってどこで誰が売っていたのかという。

【鉄矢会長】 ニーズがなさそうな気がするようなものなんだけど。

【原田委員】 紙芝居にも見えなく……。

【鉄矢会長】 そうそう、一瞬紙芝居だと思ったんだけど、面白かったな。ありがとうございます。

【原田委員】 私も楽しかったです。何か発見したぞというわくわく感があるんですよね、会場に。実際絵を見ると、どうってことない絵ですよ、風景も。だけど、台湾の風景ってこんな赤かったっけという、全体的に赤茶色のトーンで、見ていると何かほっこりしていく感じがしました。それで、銀座でやった展覧会、1935年のしおりが置いてあって、あれを読んだら、いいこと書いてあるなと思ったんですけども、奇をてらわず浮ついていない、穏やかだけでも未熟でもない、今ちょっと訳したんですけども、最後は、「韻致の匂ひ深し」。押韻の韻に、ちは致る。辞書をひいたら、洗練された風雅な趣が深い。すごい褒め言葉なんですよ。多分この時代の絵というのは奇をてらっていて、浮ついていて、ちゃらちゃらしていたと思うんですが、その中で彼の絵は全然そういうことと関係なく自然に、本人もそうだったということを、しおりを書いた人が発見したのかなと。どうってことないけど、あれを見ていると、いいなと思うのはそういうことが伝わってきたのかなと。

さっき先生がおっしゃったような、発見をしたんだから、この後もっと深掘りをして、この美術館の宝になるのではないかというような気が、もっともっと謎があるような気がしました。

【鉄矢会長】 11号11款か何かの、図画教員は目的じゃなくて何とかって書いていましたね。図画工作のすべきことはみたいなタイトルの文章があると書いてあって、あ、本もある、中身が読めないと思って。

【中村学芸員】 実はあれ、リッショウホウジョウの後身のリッショウ高校から借りてきたもので、あちらの学校にももうあれしかなかったのに現物を貸してくださったんですけども、開いてみるとぼろぼろになっちゃうので。

【鉄矢会長】 写真でもいいから読みたいなと思って、どんな文章を書いたのかなというの。

【中村学芸員】 やっぱそういうこと言うと、あの時代に図画教育というものはどう行われるべきかというのを自分の画家としてのスタンスというものとは、ある程度冷静に切り離して考えているんですね。やっぱり画家というものになっていくような、突出した才能というものを見つけ出して育成していくというのが、図画教育なんじゃなくて、ある程度満遍なくみんなが絵を書くということをやることによって、どういう効果が期待できるのかということに目を向けて書いているので、わりあいそういう、理知的な考え方というものを持って、芸術とか図画教育というものを考えていくという、画家とはまた違った面としての富永さんの側面を見ることができます。

【鉄矢会長】 ぜひ、美術教育学会で翻訳して現代文で載っていただけると勉強になると思います。ありがとうございます。

そのほかございますでしょうか。

【平田委員】 小金井の子供たちの鑑賞教室、本当にありがとうございます。先ほどお話を伺った中で、鑑賞の態度であったりとか、何かポイントとか、もし事前指導としてこういうのがあったら、伝えていただければ、次タイミングよく12月頭の4日に校長会があるので、そのときに話そうと思うんですけども。

【河上学芸員】 皆さん事前授業とか、美術の先生にちゃんと事前に注意事項とか、各行でちゃんと学んでから来てくださるので、基本的には皆さん、鑑賞のポイントとか、どういうふうに鑑賞すべきかとか、走ってはいけない、触ってはいけないとかというのは全部分かった上でいらっしゃるんですけども、やっぱり朝バスに乗ってうきうきで来ちゃって、ここに着いたら、皆さんテンションが上がっていたりとか、でも本当にそれもクラスによって全然違うんです。同じ学校でも、1組目はすごい元気なんだけど、もう2組目の子供たちはシーンしてお話を静かに聞くタイプだったりとか、3組目は3組目で全然違うとかなので、多分それをならすようなインストラクションみたいなものは多分ないとは思いますが、それに対応できるぐらいの、やっぱりさっきの話に通ずるんですが、大人の目が足りないというのが、足りないというか多ければ多いほどよくて、そういうふうなことを考えると、先生方、教員の皆様にいま一度先生たちは子供を見てねというのが、やっぱり先生たちも鑑賞に没頭しちゃったりすると、1人、目が足りなくなっちゃうんですよね。

【鉄矢会長】 先生は事前に見てねと。

【河上学芸員】 美術の先生はもちろん分かっているんですけども、担任の先生なんかはまちまちというか、引率として来ているという意識を持ってくださっている先生と、鑑賞教室で一緒に参加しているという意識でいらっしゃる先生もいて、なので、そこはちょっと共通認識として大人の目を持って来ていただけると。

【鉄矢会長】 引率者ですから。

【平田委員】 分かりました。

【河上学芸員】 でも、さっきもやんちゃって言っても別に暴れるとかということはないので、皆さん楽しんで帰ってくださるので、それは毎回どの学校さんも。

ただ、あとは時間の差が結構今年は出てきていて、去年もあったんですけども、去年の場合は、5クラスの学校さんがあって、それはしょうがないとなったんですけども、今年5クラスの学校はなくて、4か3なのにもかかわらず、30分の学校と1時間の学校と差が出てきてしまうというのが、でもちょっと学校の事情もあるかと思うんですが、そこら辺は皆さん、五、六十分は、もし可能であれば滞在して、作品と緑地と見てもらえると、非常に満足度の高い教室になるかなと思います。

【平田委員】 分かりました。

【鉄矢会長】 平田先生、ぜひ前半の部分ははしょっていいと思うんです。前半の部分が、先生から校長会で校長先生に話して、校長先生がそれを学校に言ったら、とんでもなくみんな緊張して、あなたは指導者として行くんだからという声が校長から出たらちょっと怖いだろうなと今聞いている。先生はやさしくかもしれないですけども、校長先生がどう言うかによっては。

【河上学芸員】 でも、先生方にも楽しんでいただきたいのはもちろんなんですけれども、でも本当に先生が、これ、カットで。本当に担任の先生が1人自分で鑑賞を始めちゃうパターンもあって、そうすると1人抜けてしまうと、鑑賞教室では結構大きな穴になってしまって、先生がゆっくり見ている横で、子供がもうんにゃーとかやっていて、集中してしまって、うれしいんですけど。なので、一応、美術の

【鉄矢会長】 それはどういうふうに伝わるのか、怖いな。

【河上学芸員】 美術も先生にもその話はいつもさせていただいているので、担任の先生にもよろしくお伝えくださいというふうにはしているので。

【鉄矢会長】 先ほどおっしゃった、今度校長会があるからということで話題になるの

はちょっと。

【河上学芸員】 どうですか、そうですね。

【鉄矢会長】 校長会で、平田先生から校長先生に言われたら、校長先生はやっぱり帰って帰ってしゃべらなきゃいけないから、こういうことを美術館でっていうのは怖いなと思っちゃう。

【中村学芸員】 鑑賞教室って美術の感性を育てるという図工の授業の中での効果ということとプラスして、やっぱりどうしても社会科見学的なものとして、こういう環境に行ったらこういう振る舞いをするんだということを社会性として身につけていくというところがどうしても出てくると思うので、社会性みたいなところを大事にしていきたいなと思いつつ、美術館としてはどうしても、鑑賞教室という美術館的な感性でということなので先生たちとアプローチをしていくことになるんですけれども、やっぱりそういうことをやりつつ、ただ美術的な感性が育てばいいんだということだけじゃなくて、やりながら、それでもやっぱり社会性みたいなところというのも全然関係ないよじゃ駄目だなということも実感として感じるころはあるので。

【鉄矢会長】 それは感想ですね。

【中村学芸員】 はい。

【鉄矢会長】 校長会に向けてじゃないですね。

【中村学芸員】 違います。ただ、本当に嫌々参加するんじゃないで、楽しんで参加してくれている学校が多いということは、本当に私たちにとってはありがたく思っています。

【河上学芸員】 あとはもう一個、やんちゃな子たちがいることというのはいいことなんだと思っていて、静かなほうが怖いんです。怖いと言ってしまっているのかはあれですけど、むしろ静かに、本当に、いわゆる模範的に見ているクラスというのがあって、それはそれで非常に私たちは違和感を感じてしまうし、それは子供たちが全然緊張してもう、美術館は緊張して静かにしなきゃいけないとかという気持ちで見ちゃうと、全く絵に集中できませんというお話も、美術の先生方にはしているんですけれども、なのでちょっとそこら辺がなかなか難しいんですが、そういった意見交換というのは年に2回ぐらい、いつも美術の先生たちと美術館とで会議というか、ミーティングをしてすり合わせているところなので、先生から何か言っていただくことではない、お伝えいただかなくても大丈夫だと思いますが、でも、本当に元気なほうが安心します。

【平田委員】 もう一個の点は、今週、本町小なんですね。ちょっと見て、あと、僕は

抜き打ちで見に行くよと。もっと駄目ですか。

【鉄矢会長】 いやいや、もうお任せします。ぜひ見ていただきたいと思います。本当に子供の鑑賞は、素直に声に出ちゃうぐらいのほうが面白いので。

【河上学芸員】 いや、本当にそうです。

【平田委員】 僕なんかの心配は、やっぱり美術品だから、それが何か、うわっとか言っってこんなふうになるとまずいなとか。そういうことはない？

【河上学芸員】 それはなくて、ただ、やっぱり大人でもそうですけど、気づかずに壁にもたれかかっちゃったり、狭かったり、今回は広いスペースなんですけど、壁がちょっと中間で入っているような展示だと、誤って壁にどんとかいうのはあってはならないので、という意味で、やっぱり大人は監視に徹底しているという。なので、子供さんたちをどうとかというよりも、むしろ大人をもうちょっと増やしたりとか、とにかくそこは子供をどうにかするのではなく、大人がどうにかするというほうを強化したいといつも思っています。子供さんたちは全然自然な動きです。前も緑地で展示を見たときとか、湧き水飲んじやったりとか。そういうのとか、もう最高のエピソードだなと思いながら、でも、そこに駄目だよって一言がなかったことが問題であってというようなお話です。すいません、長くなっちゃって。

【原田委員】 さっきの先生が自分が鑑賞するのに夢中になっちゃうという話を聞いて、もしかすると先生は忙し過ぎて、ふだん美術館に行ったりする時間がないのかなと。そういう意味じゃ鑑賞教室は先生も解放する時間になるという感じがしまして、いろんな効果があるなど。

【鉄矢会長】 あと、先生が集中して見るのを、見る子供がいるというのも、もしかしたらそこを、あ、先生も見ているんだというように感じる子供も出てくるんだと。目も離れているんでしょうけど。

【河上学芸員】 でも、それはあると思いますね。

【鉄矢会長】 背中で学ぶ鑑賞の仕方ってあるんでしょうね。

【河上学芸員】 ただ人が多ければもうそれはグッドという感じですね。

【平田委員】 はい、分かりました。

【鉄矢会長】 はい、そのほかございますでしょうか。

なければ、2番の今後の展覧会教育普及事業等に移っていただきます。よろしく願います。

【五木田学芸員】 学芸員の五木田です。よろしくお願いします。

今後の展覧会・教育普及事業等の1番の展覧会につきまして、御説明させていただきます。次回の展覧会は所蔵作品展になりまして、現在仮称で、「ナカムラケンイチのシン人物画鑑賞」ということで準備を進めております。中村研一さんの名前はもう何度も登場して、皆様にとってはなじみのある中村研一という漢字が固定していると思いますが、一度その字を解体して、松山ケンイチじゃないですけど、片仮名にしてちょっとほぐしつつ、シン・ゴジラじゃないですけど、新しい見方を提案しますということでコンセプトを考えているところでございます。

この人物画に絞ったもともとの理由は、寄贈作品が受け取られた後修復が終わりまして、いよいよ展示、公開できるという状況でスタンバイしているととても興味深い肖像画が1点あります。長岡外史さんという明治時代から昭和前期にかけて活躍した軍人、政治家の方の肖像画なんですけれども、これを初めて公開する展覧会としてこの人物画鑑賞というのを考えたという次第です。

この長岡さんはプロペラひげという名前で有名な人で、鼻の下から左右に向かって40センチぐらいぴゅーっと伸びているすごいひげの人なんですね。それを真正面からきちっと、その人物の特徴を描いているという中村研一さんのとても質の高い肖像画がありますので、それをお見せするというのが趣旨になります。

それで、展覧会の会期は3月23日から5月11日、休館日は月曜日で、観覧料は所蔵品展の場合としまして、一般200円、小・中生100円となります。中村研一さんの人物画はこれまでたくさん展示されてきたので、もう何度も御覧になったという方もたくさんいらっしゃると思いますが、この方が美学者と対談した岩波新書がありまして、皆様御存じと思いますが、そこにいろいろな画家の名前を出しながら、いろいろこういうふうと思うとか、こういうところがいいんだというのを縦横無尽にしゃべっているんですね。そういう言葉などを抽出しながら、キャプションのところに添えて説明をしながら、中村研一さんにとってはこういう思いからきつと書いたんじゃないだろうかという、そういう言葉をつむぎながら、皆さんに御紹介することができればと思っております。ヨーロッパのティツィアーノとか、レンブラントとか、ベラスケス、ドラクロワ、コロー、マネ、そういう有名画家の人がとても好きで、生涯にわたって画家の名前が出てくるんですよ。そういうところを皆様に言葉を通してお見せできればいいなと思っています。

ページをめくっていただくと、概要として3行だけ簡単に書きました。昭和時代に活躍

した中村研一さんということで、ちょっと昭和ということとリンクしているんですけども、来年は中村研一さんが生まれて130周年、それから戦後小金井に移住してこられて80年目なんですね。そういう節目がありまして、昭和元年から数えると、来年が昭和100年目に当たるということもあって、中村さんを通して昭和の写実主義というのをもう一回見ると、そういう角度の展示です。

長岡外史さんの肖像画については、これから少し研究も進めまして、展示の中でメインビジュアルとしてそれを紹介し、長岡さんという人物そのものも詳しく説明できればいいなと考えております。

簡単ですけども、以上となります。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。

続いて鑑賞教室、教育普及のほうは、ここに記載のとおりということでしょうか。

【中村学芸員】 こちらに書かれておりますように、これからの日程というところで、全9校のうちの残りの5校、それぞれ日程は以下に記載しておりますとおりで予定しております。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。

では、今後についての質問に御意見等ございましたらお願いします。大丈夫でしょうか。

では、その他、何かございますか。ございませんでしたら、事務局のほうから次回の運営協議会の日程、その前に畑島さん、何か感想を言いたいですよね。

【畑島委員】 言いたいです。

【鉄矢会長】 私がするする行ってごめんなさい。

【畑島委員】 いいえ。ちょっと見つめちゃいました、すいません。ちょっと幾つか参加もさせていただいて、まずチケットがシールになっていたのがすごくうれしくて、親徳さんのですね、ノートに貼ったら親徳ノートができるという、すごいうれしかったです。

それからギャラリートークも参加させていただいたんですけども、皆さんの苦労が本当にひしひしと伝わってきて、その苦労が親徳さんという人を浮き上がらせるいい展覧会だなと思って、例えば、親徳さんが歌った短歌、そういったものも探し出してきて、ギャラリートークの中で紹介されたりとかして、本当にこういう人がいたんだというのをすごい身近に感じられてよかったです。

それから、私も小金井市の小学校を卒業しているので、鶯原の理想郷というのがあったときに、うわーっと思って、ここ行ったと思って。

【中川委員】 私ものです。ここという。

【畑島委員】 ね。この人は小金井に住んでいて、鶯原に美術旅行に行った人なんだなというのが、物すごいよく感じました。

それから写真ワークショップも参加させていただいて、「花侵庵」の中に入れたということが本当にうれしかったです。「花侵庵」の中に入って光を感じるというワークショップだったので、「花侵庵」の中の光をいろいろ見ることができて貴重な体験ができたなと思いました。ワークショップで感じたのが、いろんな世代の方が、若い方から結構高齢な方までいらして、地域というか、地域を越えていたと思うんですけど、いろんな世代の交流の場になっていたというのがすばらしいワークショップだなと思いました。

そんな感じです。ありがとうございました。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。

【原田委員】 チケットの素敵だって方々で聞きますね、毎回素敵なんですけどね。

【中村学芸員】 今回チケットはいろいろありまして、これは議事録に残さないでいただけだと思いますけれども、実はシールになっているのは、チケットをつくるお金がなくて、今回本当はノベルティーのシールをつくるということで予算がおりていたんですね。そのノベルティーのシールをつくる予算をチケットをつくる予算に回すことになりまして、せっかくだからチケットは、本来シールをつくるはずだったということを残す形で、どうせだったらやっぱり半券を持って帰って取っておく人なんか貼っておけるようにしようということで、シールとして残すという方向になったという経緯があります。

【鉄矢会長】 これから美術館ではやるかもしれないですね、もしかしたら。

【中川委員】 すごくいいと思いました。

【鉄矢会長】 チケットって持っても、コレクターはこうやって並べるけど、あとの人はどうしようかと、貼れるとしばらくは。面白いな、ありがとうございます。議事録からカットだそうです。

では、次回の運営協議会の日程について、事務局からお願いできますでしょうか。

【事務局】 残り、あと1回あるんですけれども、年明けて、1月の終わりから2月、3月、また皆さんいろいろお忙しいかと思うので、1月の終わりか、2月ぐらいですかね。いかがでしょうか。3月のほうが。

【中川委員】 受験が。

【事務局】 そっか、受験とかで。

【鉄矢会長】 私が言えばずれますね。私が言えばいいというので、1月の、今日何曜日でしたっけ。

【事務局】 今日は火曜……。

【原田委員】 水曜日。

【事務局】 あ、水曜日、ごめんなさい。

【鉄矢会長】 私、1月29日、大丈夫です。

【中川委員】 ああ。

【鉄矢会長】 駄目？

【中川委員】 ごめんなさい、来れないです。すいません。

【事務局】 じゃあ、2月ですね。

【鉄矢会長】 あとは1月30日も大丈夫です。

【中川委員】 大丈夫です。

【原田委員】 あ、30日駄目です。すいません。

【鉄矢会長】 ちょっと待ってください。では、1月、その前だと1月23。

【中川委員】 大丈夫です。

【原田委員】 大丈夫です。

【山村委員】 大丈夫です。

【鉄矢会長】 1月23にしましょうか。1月23、大丈夫ですね、私も大丈夫です。

【原田委員】 木曜日ですね。

【鉄矢会長】 木曜日です。

【山村委員】 18時30分から？

【鉄矢会長】 18時30分でよろしいですね。

【中川委員】 はい。

【鉄矢会長】 すごい、決まった。では、2025年ですね、1月23日、18時30分からはけの森美術館運営協議会、第4回目にしたいと思います。スケジュール調整、よろしくをお願いします。

ほかになれば、ありますか。

【中川委員】 大丈夫です。

【鉄矢会長】 大丈夫ですか。

では、ほかになれば、以上ではけの森美術館運営協議会を終了いたします。お疲れさ

までした。

— 了 —